

## ■研究調査レビュー

### 島嶼部からみる歴史研究の新地平

—ニューファンドランド島（カナダ大西洋岸）を題材に—

細川 道久（鹿児島大学法文学部）

#### 1. はじめに

##### ——軽視されてきたカナダの島嶼性——

北米大陸のおよそ5分の2、日本の約26倍の998万km<sup>2</sup>という広大な国土(世界第2位)を有するカナダ。「海から海へ(A Mari Usque Ad Mare)」というモットーを掲げているように、大西洋岸から太平洋岸まで北米大陸を横

断するカナダには、通例「大陸国家」という形容がなされる。

だがカナダは、広大な大陸本土に加えて、数多くの島々も擁している。にもかかわらず、この点はあまり注目されてこなかった。「大陸国家」という形容は、カナダの島嶼性の軽視につながってきたのではなかろうか。

【表1】カナダの島々（1万km<sup>2</sup>以上）

順位	名称	面積 (km <sup>2</sup> )	位置
1	Baffin	507,451	S Arctic Archipelago
2	Victoria	217,290	S Arctic Archipelago
3	Ellesmere	196,236	Queen Elizabeth Is
4	Newfoundland	108,860	Atlantic Coast
5	Banks	70,028	S Arctic Archipelago
6	Devon	55,247	Queen Elizabeth Is
7	Axel Heiberg	43,178	Queen Elizabeth Is
8	Melville	42,149	Queen Elizabeth Is
9	Southampton	41,214	Hudson Bay
10	Prince of Wales	33,338	S Arctic Archipelago
11	Vancouver	31,284	Pacific Coast
12	Somerset	24,786	S Arctic Archipelago
13	Bathurst	16,042	Queen Elizabeth Is
14	Prince Patrick	15,848	Queen Elizabeth Is
15	King William	13,111	S Arctic Archipelago
16	Ellef Ringnes	11,295	Queen Elizabeth Is
17	Bylot	11,067	S Arctic Archipelago
18	Cape Breton	10,311	Nova Scotia

*The Canadian Encyclopedia*, 2nd ed., vol. 2, Hurtig Publications, Edmonton, 1988, p. 1098.

まずは、カナダの島嶼が意外にも（?!）多い点を確認しておこう。世界最大の島であるグリーンランド(Greenland) (デンマーク領)の2,175,596 km<sup>2</sup>には到底及ばぬものの、【表1】に示すように、カナダには1万km<sup>2</sup>超の島が18ある。この18島の合計面積は1,448,735 km<sup>2</sup>で、これだけでカナダの国土全体の14.5%を占めている。無論カナダにあるのは、これら18島だけではない。

《カナダに島はいくつあるのか?》—— 実は、この問いへの確固たる答えはない。定評あるカナダ事典は、次のように記している。「カナダにある島の総数はいまだに確定されていないが、きわめて多いのは確かである。ジョージア湾(Georgian Bay) <sup>(1)</sup> の東岸部だけでも、約3万の島がある（「サーティ・サウザンド・アイランズ(Thirty Thousand Islands)として知られる）」 <sup>(2)</sup> と。

「サーティ・サウザンド」にははるかに及ばないが、「サウザンド・アイランズ(Thousand Islands)」もある。これは、アメリカ合衆国との境界を流れるセントローレンス川(St. Lawrence River)にある1864の島からなる地帯であり、「サウザンド・アイランド・ドレッシング」の由来となった。

「サーティ・サウザンド・アイランズ」や

「サウザンド・アイランズ」のほか、北極海にあるクイーン・エリザベス諸島(Queen Elizabeth Islands)、バフィン湾(Baffin Bay)を挟んでグリーンランドと向かいあうカナダ最大の島バフィン島(Baffin Island)など、カナダの島嶼は「サウザンズ(無数(thousands))」(!)なのである。

ちなみに、日本人がよく知るカナダの島は、NHK連続テレビ小説『花子とアン』(2014年4月~9月放映)でも話題となったL・M・モンゴメリ(Lucy Maud Montgomery)の『赤毛のアン』(原題は*Anne of Green Gables*)の舞台プリンス・エドワード島(Prince Edward Island)であろう。また、日本人が最も訪れる太平洋岸のバンクーバー(Vancouver)が属するブリティッシュ・コロンビア州の州都ヴィクトリア(Victoria)は、バンクーバー島(Vancouver Island) (カナダ第11位)にある。バンクーバー島はアジア太平洋地域の防衛拠点であり、エスクワイモルト(Esquimalt)には海軍基地がある。同島には19世紀後半から20世紀中葉まで移民検疫所がおかれ、ケベック州のグロス島(Grosse Île)、ノヴァスコシア州のローラー島(Lawlor Island (Lawlor's Island, Lawlors Islandとも表記))、あるいはアメリカ合衆国ニューヨークのエリス島(Ellis Island)に匹敵



【図1】カナダ全図

## 【10州と3準州】

- ・ニューファンドランド・ラブラドル州  
(Province of Newfoundland and Labrador)
- ・ニューブランズウィック州  
(Province of New Brunswick)
- ・ノヴァスコシア州 (Province of Nova Scotia)
- ・プリンス・エドワード・アイランド州  
(Province of Prince Edward Island)
- ・ケベック州 (Province of Quebec)
- ・オンタリオ州 (Province of Ontario)
- ・マニトバ州 (Province of Manitoba)
- ・サスカチュワン州  
(Province of Saskatchewan)
- ・アルバータ州 (Province of Alberta)
- ・ブリティッシュ・コロンビア州  
(Province of British Columbia)
- ・ユーコン準州 (Yukon Territory)
- ・北西準州 (Northwest Territories)
- ・ヌナブト準州  
(Nunavut Territory) : 1999年発足

する役割を担っていた<sup>(3)</sup>。このほか太平洋沿岸地域には、アメリカ合衆国アラスカ領と接してハイダ・グワイ(Haida Gwaii)(2010年、クイーン・シャーロット諸島(Queen Charlotte Islands)から改称)があるが、同諸島には先住民ハイダ族(Haida)が住んでいる。

州都といえば、10の州と3つの準州からなるカナダで、3つの州都が島嶼部に置かれている点にも留意しておきたい。その3つとは、先述のヴィクトリアのほか、プリンス・エドワード・アイランド州のシャーロットタウン(Charlottetown)、ニューファンドランド・ラブラドル州のセントジョンズ(St. John's)である<sup>(4)</sup>。ニューファンドランド・ラブラドル州は、旧名称ニューファンドランド州から2001年に名称変更した州だが、【図1】に見るように、ニューファンドランド島(Island of Newfoundland)(カナダ第4位)と大陸本土側のラブラドル地方からなっている(それぞれニューファンドランド犬やラブラドル犬の発

祥地として知られる)。なお、Newfoundlandの語源が「新たに発見された土地(new-found-land)」であることから「ニューファンドランド」と記すことがあるが、実際の発音に近い「ニューファンドランド」と表記する。

カナダの島嶼部の多くは大陸本土の周辺に位置しており、その重要性は軽視されてきた。もともと、近年、北極圏をめぐる資源開発や温暖化に伴う新たな航路の可能性から、北極海域の島嶼部が脚光を浴びつつある<sup>(5)</sup>。また、多文化主義政策の一環で、島嶼部に住む先住民社会に光が当てられているのも事実である。とはいえ、「大陸国家」の中核をなすオンタリオ州やケベック州にいざんとして重点がおかれていることは否定できない<sup>(6)</sup>。

このことはカナダにおける歴史研究でも例外ではない。個々の地域やエスニック集団の歴史研究が進んでいるといっても、島嶼部を重視した歴史研究の比重は圧倒的に低く、個々の地域史(地方史)の範疇に留まっているのである。島嶼部が有していた歴史的位

置は重要かつユニークであるにもかかわらず、十分に理解されてこなかったのである。ここで日本人のカナダ認識について付言するならば、たとえば、プリンス・エドワード島を『赤毛のアン』一色でとらえてしまうのはいささか残念である。同島は、第2次英仏戦争で追放されるまでフランス系住民「アカディア人(Acadiens)」の植民地(「サン・ジャン島(Île Saint Jean)」)であったばかりか、カナダ自治領(ドミニオン・オブ・カナダ(Dominion of Canada))結成に向けて連邦化構想を討議した「シャーロットタウン会議(Charlottetown conference)」(1864年9月)の開催地でもあった。英仏抗争に翻弄された土地でもあり、「連邦結成(Confederation)のゆりかご」でもあった同島は、カナダのみならず、ヨーロッパを含めた北大西洋世界の中で歴史的に重要な場所だったのである<sup>(7)</sup>。

歴史的に重要な島嶼部は、プリンス・エドワード島に限らない。ニューファンドランド

島もしかりである。以下では、ニューファン  
ドランド島に焦点をあて、同島がもつ歴史的  
重要性を素描する。そのうえでニューファン  
ドランド島（ラブラドル地方に当てはまる記  
述もあるが、専らの対象はニューファンドラ  
ンド島である）を考察することで歴史研究に  
いかなる寄与ができるのかにつき展望してみ  
たい。なお、これまで筆者は、オンタリオ、  
ケベック両州のナショナリズムや、西部諸州  
での移民などについて研究してきたが<sup>(8)</sup>、  
ニューファンドランド島を具体的に論ずるの  
は本稿が初であり、試論の域を出ないことを  
断っておく。

## 2. ニューファンドランド島の歴史概観

### ——最古のイギリス海外植民地にして、 最も新しいカナダの州——

長期にわたってニューファンドランド島は、  
カナダ領ではなかった。カナダ自治領が成立  
した 1867 年から 82 年後の 1949 年になっ  
て 10 番目の州としてカナダに加入したので  
ある。このようにカナダの新参者である一方、  
同島は、大陸本土側のカナダよりも早い時期  
からヨーロッパと接触があった。

北米の地を訪れた最初のヨーロッパ人は、  
ヴァイキングのリーフ・エリクソン(Leifur  
Eiriksson)であった。北欧伝説『サガ(Saga)』  
によれば、1000 年頃、ブドウが実る豊かな国  
「ヴィンランド」を発見したとされる。その  
後 14 世紀までヴァイキングは活動した。1960  
年にニューファンドランド島のランス・オ・  
メドーズ(L'Anse aux Meadows)で彼らの遺跡  
が発見され、現在、ユネスコ世界遺産（文化  
遺産）に指定されている。

大航海時代に入ると、1497 年、ジョン・カ  
ボット(John Cabot) (ジョヴァンニ・カボット  
(Giovanni Caboto)) がニューファンドランドと  
思われる地に到達し、イギリス国王による領  
有を宣言した。彼はニューファンドランド沖  
に、後に「グランド・バンクス(Grand Banks)」  
として知られる豊かな漁場を発見した。特に  
鱈(タラ)は、当時のヨーロッパでは重要な

栄養源であるのに加えて、カトリック諸国で  
は一定期間獣肉を断つ習慣もあって、きわめ  
て需要が高かった。そのためニューファン  
ドランド島は国際漁場として活況を呈した。  
1583 年には、イギリスのハンフリー・ギルバ  
ート(Humphrey Gilbert)が、女王エリザベス  
(Queen Elizabeth)の名の下にニューランドラ  
ンド島の領有を宣言した。この背景には、ス  
페인帝国の版図に分け入っていくイギリス  
の野望があった。こうしてニューファンドラ  
ンド島は、(アイルランドの位置づけにもよる  
が) イギリス初の海外植民地となったのであ  
る。もともと、植民地といっても、夏季の操  
業時に活動がほとんど限られた季節的漁場基  
地であった。1610 年にニューファンドランド  
植民会社が設立されてから、永続的な植民が  
徐々に進んでいった<sup>(9)</sup>。



セントジョーンズ港に建つギルバート上陸記念碑

では、その後ニューファンドランド島はど  
のような道を歩んできたのだろうか。以下で  
は、20 世紀中葉にカナダに加入するまでの同  
島の歴史を 5 つの時期に区分して、それぞれ  
の時期がもつ特徴、あるいは、すべての時期  
に共通する特徴を抽出したい<sup>(10)</sup>。

### ①国際漁場としての発展と英仏抗争

季節的漁場基地から次第に定住が進んだが、  
国際漁場を擁する同島の経済基盤は鱈魚を中  
心とする漁業であった。経済史家ハロルド・  
イニス(Harold Innis)の「ステープル理論(Staple  
theory)」で知られるように、カナダの発展を

促したのは、魚類、毛皮、木材、小麦、鉱物などの天然資源であった。干鱈と鱈油はカナダで最初の「国際商品」としてヨーロッパ市場に送られたのである<sup>(11)</sup>。ニューファンドランド島は、イギリス、南欧との三角貿易の一角を担うとともに、ニューイングランドや西インド諸島とも貿易しており、イギリス本国経済とニューイングランド経済の双方に組み込まれていた。加えて、フランスもプラセンシア(Placentia)を拠点に漁業を行っており、英仏の対立は同島をめぐることも激化していった<sup>(12)</sup>。

17世紀後半から18世紀後半にかけて繰り広げられた英仏抗争では、北米大陸の玄関口として戦略的・地政学的にも重要であったニューファンドランド島は戦場となり、その領有をめぐる揺れ動いた。1713年のユトレヒト条約では、ニューファンドランド島はイギリス領となったが、同島北部の「フランス海岸」における漁業権はフランスに与えられた。1763年のパリ条約では、ケープ・ブレトン島(Cape Breton Island)と引き換えに、ニューファンドランド島南のサン・ピエール島(Île Saint Pierre)とミクロン島(Île Miquelon)がフランスに割譲された。「フランス海岸(French Shore)」「(条約海岸(Treaty Shore))」ともをめぐると争は、1904年の英仏協商締結によってフランスが同地の漁業権を放棄するまで続いた。また、サン・ピエール、ミクロン両島は、現在もフランス領である。ケベック州など大陸本土や沿海植民地(沿海州)(Maritimes)(ニューブランズウィック、ノヴァスコシア、プリンス・エドワード・アイランドの3植民地(州))のみならず、ニューファンドランド島地域にもフランス社会は残存しているのである。

なお、通例、1760年のモンリオール(Montreal)陥落で北米のフランス領である「ニューフランス(New France)(ヌーヴェル・フランス(Nouvelle France))」が消滅し、イギリスによる軍政が開始されたとされる。だが、ニューファンドランド島漁場に対する

警戒を強めたフランスは、1762年に11週間にわたってフェリーランド(Ferryland)からトリニティ(Trinity)までの同島沿岸部を占有していた(シグナル・ヒル(Signal Hill)の戦い)。したがって、カナダにニューファンドランド島を含めるか否かで、歴史記述は異なるのである。



セントジョーンズ市街地

(シグナル・ヒルとカボット・タワーを望む)

なお、1898年、シグナル・ヒルにはカボット上陸400年とヴィクトリア女王(Queen Victoria)在位60年(Diamond Jubilee)を記念してカボット・タワー(Cabot Tower)が建てられた(同じ年、カボットの探検を支援した商人がいたイギリスのブリストル(Bristol)にもカボット・タワーが建立された)。同タワーはまた、1901年にG・マルコーニ(Guglielmo Marconi)が大西洋横断の無線電信実験に成功した場所でもある。

このようにニューファンドランド島は、国際漁業、イギリス本国経済とニューイングランド経済、英仏抗争といった北大西洋世界の歴史のうねりのなかで、大陸本土側とは異なる時を刻んでいたのである。

## ②「漁船団長」制度から責任政府へ

ニューファンドランド島に代議政体が導入されたのは、1832年であった。大陸本土側では18世紀後半に導入されていたのに対してニューファンドランド島で遅れたのは、イギリス本国が積極的な植民奨励策を講じず、

それゆえ統治制度の整備が進まなかったからである。

17世紀初頭から18世紀末まで同島の秩序維持の役割を果たしたのが「漁船団長(fishing admiral)」制度であった。これは、国籍に関係なく港湾に最初に入港した船が最も良質の漁場と浜を獲得でき、その船長が湾内の法秩序を取り締まるという独特の法慣行であり、1634年の「ウェスタン・チャーター(Western Charter)」と1699年の「ニューファンドランド法(Newfoundland Act)」「ウィリアム王の法(King William's Act)」ともによって追認された。「漁船団長」が取り締まるのは夏季に限られており、冬季は無法状態に置かれていた。1729年、ニューファンドランド島海域の防衛にあたるイギリス艦隊司令官が総督となり、法令の発布や治安判事の任命を行なうようになったが、総督も1817年までは夏季にしか滞在しておらず、冬季の状況が改善された訳ではなかった<sup>(13)</sup>。

1832年になって代議政体が導入され、総督、評議会(総督評議会)、選挙制議会からなる体制が誕生した。しかし、評議会と議会が対立したため、1842年に政体機能は停止され、1848年になって復活した。当時、大陸本土側にある連合カナダ植民地(United Province of Canada)(オンタリオ、ケベック両州の前身)と、ニューブランズウィック、ノヴァスコシアの植民地では責任政府(responsible government)(議員内閣制の植民地版)が導入されていた。ニューファンドランド島の場合、責任政府を獲得するのは、1855年のことである。

1860年代、連合カナダ植民地では英領北アメリカの植民地を連邦する構想が、沿海植民地では「沿海同盟(Maritime Union)」構想が、それぞれ検討されていた。「沿海同盟」構想協議のために沿海植民地が開催した1864年9月の「シャーロットタウン会議」にオブザーバー参加を許された連合カナダ植民地代表が連邦化構想を提示し、同構想をめぐって再協議の場を設けることになった。それが同年10

月の「ケベック会議(Quebec Conference)」であり、これがカナダ自治領誕生を決定づける重要な会議となった。ニューファンドランド島は「ケベック会議」に代表は送ったものの、住民は英領北アメリカの植民地の連邦化に対して前向きではなかった。



ケベック会議の代表たち

後列右から3番目が立法議会議長(保守党)カーター(Frederick B. T. Carter)、4番目が野党自由党党首シー(Ambrose Shea)

MIKAN 3206076 Library and Archives Canada

ニューファンドランド島の関心は、大陸本土に対してではなく、イギリス諸島に向いていたのである。1866年に大西洋横断ケーブルが敷設され、同島がイギリスと結ばれたことも、西側よりも東側とつながっているという意識を強めたのだ。カナダ自治領の誕生後、カナダへの加入の可能性が検討され、カナダとの協議も行なわれることもあったが、カナダ側も乗り気ではないこともあって不調に終わった。

### ③変則的な「ドミニオン」

20世紀に入ると、ニューファンドランド島では漁業のみならず森林業も発展するようになった。対外関係でも「若干の」変化が見られた。それまで同島は、カナダ、オーストラリアなどの他の自治植民地とともに、イギリス帝国の植民地会議(colonial conference)に代表を送っていたが、1907年の植民地会議において、自治植民地をさす名称として「ドミニ

オン(dominion)」が採択された。植民地会議も帝国会議(imperial conference)と改称された。こうした動きは、イギリス本国と「ドミニオン」の関係の変容を促すものであった。だが、それを主導したのはカナダやオーストラリアなど先発自治植民地であったし、これによってニューファンドランド島の対外プレゼンスが大きく向上した訳ではなかった。

第1次世界大戦が勃発すると、他の「ドミニオン」同様、ニューファンドランド島も積極的な戦争貢献を行なった。同島で最も記憶に留められているのは、ソンム(Somme)の戦いの初日である1916年7月1日のボーモン・アメル(Beaumont-Hamel)の戦いである。なお、オーストラリアとニュージーランド連合軍(Australian and New Zealand Army Corps (ANZAC))による「アンザック神話」を生んだガリポリ(Gallipoli)の戦いでも、多数のカナダ人兵士が死傷したヴィミー・リッジ(Vimy Ridge)の戦いでも、ニューファンドランド島の連隊が犠牲を払ったことも付言しておきたい。

他の「ドミニオン」で第1次世界大戦での戦争貢献・犠牲が「ドミニオン・ナショナリズム」を高めたように、ニューファンドランド島でも同様の動きがみられた<sup>(14)</sup>。だが、それは限定的であった。それにつき言及する前に、カナダとニューファンドランド島では、戦争の記憶・顕彰のあり方は同じではなかったことに触れておこう。



セントジョンズ市街にある戦争記念碑

ニューファンドランド島では、ボーモン・アメル(Boaumont-Hamel)の戦いが行なわれた7月1日を「メモリアル・デー(Memorial Day)」として、戦争犠牲者を追悼してきたのである。1949年のカナダ加入後になって、7月1日を「ドミニオン・デー(Dominion Day)」(1867年7月1日、英領北アメリカ法(British North America Act)の発効によってカナダ自治領が成立したのを記念する日。1982年に「カナダ・デー(Canada Day)」への改称が決定し、翌年より名称変更を実施。)としても挙行するようになった。またニューファンドランド島では、第1次世界大戦が終結した11月11日は、休戦記念日(Armistice Day)である(カナダでは「戦没者追悼記念日(Remembrance Day)」と呼ばれるが、現在ニューファンドランドでも Remembrance Day の呼称が使われるようになった)。

第1次世界大戦でのイギリス帝国に対する貢献によって、ニューファンドランド島の地位が高まったのはたしかである。たとえば、1918年に高等弁務官(High Commissioner)が任命され、「ドミニオン・オブ・ニューファンドランド(Dominion of Newfoundland)」と称されるようになった。とはいえ、他の「ドミニオン」と対等に扱われた訳ではなかった。パリ講和会議でイギリスは、他の「ドミニオン」とインドの代表の意見が重視した結果、ニューファンドランドは、ヴェルサイユ条約に調印できなかったし、国際連盟(League of Nations)の原加盟国にもなれなかったのである。

このように、ニューファンドランド島は、カナダに加入せず独自の道を辿ってきたのである。しかも、自治植民地として「ドミニオン」となっても、不完全な「ドミニオン」であり、イギリス帝国において変則的な扱いを受けてきたのである。このような状況は、次の時期にさらに顕著になる。

#### ④行政管理政府へ

##### ——責任政府の返上——

カナダとは異なる道を辿り、かつまた、イ

ギリス帝国の中でも不完全な「ドミニオン」でしかなかったニューファンドランド島のその後の歩みもまた変則的であった。

1926年の帝国会議でバルフォア報告書(Balfour Report)が出され、1931年にはそれを法制化したウェストミンスター憲章(Statute of Westminster)が制定された。イギリス帝国史において、この出来事は、第1次世界大戦以降の「ドミニオン」の発言力の高まりを背景とした、垂直的なイギリス帝国体制から水平的なブリティッシュ・コモンウェルス(British Commonwealth)体制への転換と解されている。

しかし、この見方はニューファンドランド島には当てはまらない。1926年の帝国会議に出席した同島代表は、「最も若いドミニオンというよりも最古の植民地」として自らを認識していた。また、ウェストミンスター憲章に対して、それがイギリスとの紐帯が弱まることになることとして、ニュージーランドにならい、議会が批准しない限り適用されないという条件付きの支持をした<sup>(15)</sup>。

さらに、世界恐慌による甚大な打撃を被ったニューファンドランド島は、1934年、責任政府を返上し、行政管理政府(Commission Government)に統治が委ねられることになった。イギリスは、1億ドルの負債を抱えた同島に財政介入をすとしても、責任政府体制を存続させる訳にはいかなかった。また、大陸本土側のカナダは、同島に支援の手を差しのべることはなかったし、カナダへの加入を検討することもなかった。かくして、イギリスとニューファンドランド島の代表各3名からなる行政管理政府下におかれたのである。

第1次世界大戦からウェストミンスター憲章に至る過程は、「植民地から国家へ(colony to nation)」という「ドミニオン」の成長の過程であったのだが、この道筋はニューファンドランド島にはまったく当てはまらないのである。

## ⑤第2次世界大戦とカナダへの加入

第2次世界大戦期に入ると、ニューファン

ドランド島の戦略的重要性が高まった。北米大陸の玄関口として、陸海のみならず、航空機の補給基地として同島の防衛は脚光を浴びるようになった(特に東部のガンダー(Gander)空港:1938年開港)。当時の航空機は航続距離が短いため、北米大陸本土とヨーロッパをダイレクトに飛ぶことはできなかったのである。

隣国アメリカ合衆国は、かねてから漁場や互恵通商条約をめぐる協議を行っていたが、北米大陸の防衛面からもニューファンドランド島に関心を示していた。他方、イギリス本国は、ヨーロッパでの戦況が悪化する中でアメリカ合衆国の支援を必要としていた。1941年3月に英米間で調印された基地貸借協定(Leased Bases Agreement)は、アメリカ合衆国が旧式駆逐艦50隻をイギリスに提供する代わりに、ニューファンドランド島とバミューダ諸島(Bermuda)などの英領植民地の基地用土地を99年間リースするというものだった。元々はチャーチル(Winston Churchill)とローズヴェルト(Franklin D. Roosevelt)の協議の中で立案されたものだが、協定調印前にはニューファンドランド島、カナダ双方の代表も交えた折衝が行なわれた。ニューファンドランド島は、イギリス帝国及びブリティッシュ・コモンウェルスを守りたいイギリスと、北米大陸のみならず西半球全域を防衛したいアメリカ合衆国という両者の利害が絡みあった場だったといえる。なお、戦後アメリカ合衆国はニューファンドランド島から徐々に撤退し、1994年には一切の措置が撤廃された。

英米の利害に加えて留意すべきは、カナダがニューファンドランド島の重要性を認識するようになった点である。それまで英米の利害に翻弄されることの多かったカナダは、英米協調によって北米におけるアメリカ合衆国の強大化を懸念していた<sup>(16)</sup>。それゆえニューファンドランド島にアメリカ合衆国が関与することは限定的に留めておきたかった。1941年7月にカナダが高等弁務官をセントジョーンズに派遣したのは、同島との関係を



緊密化するねらいがあった。

このように戦時下でのニューファンドランド島は重要視されたが、同島はいまだに行政管理政府下にあった。同島の将来をどうするのか、イギリスのドミニオン省(Dominion Office)は1942年から検討を開始した。同省は、カナダに協力を求めるなど、再建計画を模索したが失敗に終わった。

そこで、ニューファンドランド島の将来構想は、1946年に設けられた同島の全国会議(National Convention)で協議されることになった。同島の45名の代表からなる全国会議は、レファレンダムを実施することを決定し、責任政府への復帰か、現行の行政管理政府の継続か、を問おうとした。全国会議ではカナダ加入を選択肢に含めることを否決していたが、イギリスがこれも選択肢に含めるよう働きかけ、結局レファレンダムでの選択肢は3つとなった。

1948年6月に行なわれたレファレンダムでは、責任政府が44.6%、カナダ加入が41.1%、行政管理政府が14.3%となった。翌月の第2回レファレンダムでは、上位2つを選択肢として投票が行なわれた。その結果は、カナダ加入が52.3%、責任政府が47.7%で、カナダ加入支持が勝利した。その後、英加との交渉が行なわれ、カナダとの合同合意(Term of Union)が決着し、1949年3月31日、ニューファンドランド島は10番目の州としてカナダに加入した。

以上みたように、ニューファンドランド島のカナダ加入は、最終的にはレファレンダムという島民の意思決定によるものであった。しかし、その過程では英加の様々な思惑が絡んでいた。英加側の動きもそうだが、カナダ加入、責任政府への復帰、行政管理政府の継続、それぞれの支持派は、英加のみならず、アメリカ合衆国との関係も考慮に入れて行動していたし、実際に英加米と利害関係をもつものもいた。それゆえ、ニューファンドランド島のカナダ加入の動きは、マルチラテラルな関係史や広い文脈から捉えなければならな

いのである。



カナダへの加入文書に調印するスモールウッド(Joey Smallwood) (初代州首相)

MIKAN3194648 Library and Archives Canada

### 3. 結びに代えて

#### ——ニューファンドランド島が切り拓く 歴史研究の新地平——

前章では、カナダに加入するまでのニューファンドランド島の歴史を概観した。同島の歩みは、大陸本土側とは大きく異なっていることがわかるだろう。そのユニークさにもかかわらず、通例のカナダ史記述では見落とされてきたのである。同島はまた、イギリス帝国においても、きわめて特異な位置を占めていた。だが、従来のイギリス帝国史研究はこの点についてほとんど目配りしてこなかった。

以下では、ニューファンドランド島に焦点を当てることで既存の歴史研究に一石を投じうる可能性を論じ、ニューファンドランド島研究の意義を考えてみたい。

#### ①「もう一つの」カナダ史像

##### ——大陸国家かつ海洋国家として——

先述したように、通例のカナダ史記述では、大陸国家カナダの中核であるオンタリオ、ケベック両州が中心を占めており、ニューファンドランド島については、大航海時代の鱈漁などに言及はされるものの、それ以外の動きについては周辺的な扱いに留まっている観がある。カナダに加入するまで別個の社会であっただけに、カナダのナショナル・ヒストリ

一の枠組みの中にニューファンドランド島の歴史を組み込むことには躊躇があるのだろうか。

だが、ナショナルな枠組みを取り払えば、もっと豊かな歴史が描けるはずである。大陸本土側にあるカナダがニューファンドランド島とまったく没交渉であったのではなく、漁場、対米互惠通商、連邦化、防衛をめぐって対立や協調を繰り返していたという事実は、カナダが北大西洋岸に関心を持っていたことを示し、大陸国家のみならず海洋国家としてのカナダの歴史的諸相を明らかにすることができるのではなかろうか。もっとも、この点は、ニューファンドランド島ほどではないにせよやはり重視されてこなかった沿海植民地に光を当てることで浮かび上がらせることができるが、ニューファンドランド島まで視野に含めることでより鮮明になるであろう。

## ②イギリス帝国史の修正

### ——「ドミニオン」、脱植民地化——

ニューファンドランド島の歴史研究の意義はイギリス帝国史研究においても指摘できる。「最古のイギリス植民地」とはいつても、同島の歩みはほとんど無視されてきた。しかし、「ドミニオン」といつても、限定的な権限しか与えられず、結局は行政管理政府下におかれたという同島の歴史は、イギリス帝国史においてきわめて変則的でユニークなのである。この点に目を向ければ、従来のイギリス帝国史像を塗り替えるのではなかろうか。以下に3点ほど指摘しよう。

通例「ドミニオン」は「自治領」や「自治国」などと訳されるが、同じ「ドミニオン」であっても、ニューファンドランド島に与えられた自治と、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカなどに認められた自治とは随分異なっていた。近年、「ブリティッシュ・ワールド(British World)」／「ブリティッシュ・ディアスポラ(British Diaspora)」研究が立ち上がっており<sup>(17)</sup>、イギリスと「ドミニオン」の関係が考察されているが、「ドミ

ニオン」を一律に捉えるのは誤りであろう。たとえば、ウェストミンスター憲章への対応が、カナダ、ニュージーランド、ニューファンドランド島では異なるなど、「ドミニオン」はグラデーションをつけて分類する必要がある。

2つ目として、これはイギリス帝国に限る訳ではないが、「植民地から国家へ」という道筋をとらず、責任政府を認められた「ドミニオン」が行政管理政府に格下げされたという点は、数少ない事例ではなかろうか。

さらに3つ目として、上記2点と関わるが、ニューファンドランド島のカナダ加入は、脱植民地化と捉えうるのではないかと筆者は、大陸本土のカナダの「脱ドミニオン化(de-dominionisation)」の事例を、アジアやアフリカの植民地とは異なるユニークな脱植民地化だと考えているが<sup>(18)</sup>、行政管理政府下にあったニューファンドランド島の事例は、先発「ドミニオン」であったカナダの事例とも、時間的にも現象的にも異なる。イギリスがニューファンドランド島のカナダ加入を後押ししたのを、第2次世界大戦後の脱植民地化策の一環として捉えれば、脱植民地化を複合的かつ同時代的現象として包括的に考えることができるのではなかろうか。

## ③北大西洋関係史の修正

①の延長線上にあって必ずや視野に入れざるをえないのは、アメリカ合衆国の存在である。これは②においても同様である。カナダは、本国イギリスの動向のみならず、隣国アメリカ合衆国の動きを注視せざるをえなかった。イギリスとても同じであり、北大西洋世界のみならず、イギリス帝国及びブリティッシュ・コモンウェルスの安定のためには、対米関係は重要であった。他方、アメリカ合衆国も、漁場や互惠通商、さらには第2次世界大戦時の基地貸借協定など、ニューファンドランド島に関心をもっていた。また、前章では触れなかったが、同島へのアメリカ合衆国の影響は無視できなかつた。1例をあげれば、

1948年のレファレンダムにおいて、アメリカ合衆国との経済関係強化を望む声もあったのである。

筆者も含めて、これまで英米加の「北大西洋三角形(North Atlantic Triangle)」の視点を重視してきた。そこには、イギリス圏とアメリカ圏の両方に包摂されているカナダを含めることで、英米の対立・協調の様相、ひいては北大西洋世界の構造を明らかにできるという狙いがあった。これにニューファンドランド島を加えることで、北大西洋世界をめぐる英米加及びニューファンドランド島のせめぎあいの諸相が明らかになり、より立体的な北大西洋世界像が浮かび上がるのではなかろうか。

#### ④海域交流史

##### ——島嶼(海洋)性とグローバル・ヒストリー——

ニューファンドランド島の歴史は、英米加との北大西洋関係史の範疇におさまらない。同島は、大陸本土側のカナダよりも早い時期から、大西洋を介してヨーロッパなど他地域と接触してきたのである。昨今、海域交流に関する歴史研究は活況を呈しているが<sup>(19)</sup>、ニューファンドランド島を介した海域ネットワークが、カナダの沿海植民地やニューイングランドなどの近接地域のみならず、大西洋を越えて、イギリス、ヨーロッパ、アフリカを結びつけ、モノ・カネ・ヒト・情報・文化などが移動していた諸相を明らかにできるだろう。もっとも、海域ネットワークだけではない。現代では空のネットワークもしかりである。航続距離が長くなかった時代には、同島がカナダとヨーロッパのハブであったことも留意しておきたい。

交流史に限らない。ニューファンドランド島は、大航海時代、英仏抗争、「パクス・ブリタニア」から「パクス・アメリカーナ」への移行、など、グローバルな歴史の「荒波」にもまれてきた。この「荒波」が同島にもたらした影響を探ることは、グローバル・ヒストリーと同島の歴史の、つまりグローバルとロ

ーカルという異なった位相の歴史を接合することになる。

#### ⑤歴史記述における主体性の回復

以上4点述べてきたが、これらは、島嶼部ニューファンドランドからしか見えてこない新しい歴史研究の地平である。それは、歴史研究において周辺に位置づけられてきたニューファンドランド島の歴史の主体性を回復することにつながるだろう。

筆者は「変則」「特異」「周辺」という表現を用いてきたが、それは既存の歴史解釈において「変則」「特異」「周辺」という意味であった。①から④まで、ニューファンドランド島を他地域と対等な位置づけから解釈することができれば、「変則」「特異」「周辺」は意味を失うからである。あるいは、「特異」という表現は、「ニューフィ(Newfie (Newfy))」<sup>(20)</sup>たちの独自の社会・文化の主体的表明を意味するだろう。

\* \* \* \* \*

本稿では、ニューファンランド島を具体的な素材として、島嶼部からみる歴史研究の可能性について考察した。「変則」「特異」「周辺」で形容されるニューファンドランド島は、それ自身が「変則」「特異」「周辺」なのではない。同島に光を当てそれを主体的に描くことで「変則」「特異」「周辺」という形容は意味をなさなくなるのである。

上記の点は、ニューファンドランド島に限らず、島嶼部など「周辺」として扱われてきた地域全般に当てはまることである。ことは容易ではないことは重々承知だが、地道に積み重ねていくことは重要である。

註

(1) 五大湖(Great Lakes)の1つであるヒューロン湖(Lake Huron)の東に位置する。

(2) *The Canadian Encyclopedia*, 2nd ed., vol. 2, Hurtig Publishers, Edmonton, 1988, p. 1098.

(3) cf. Peter Johnson, *Quarantined: Life and Death at William Head Station, 1872-1959*,

Heritage House, Victoria, BC, 2013.

(4) 紛らわしい地名として「セントジョン(Saint John)」があるが、これはニューブランズウィック州の州都である。

(5) 2008年以降、カナダ政府は、北西航路探検中の1847年に北極圏で遭難したイギリス人探検家ジョン・フランクリン(Sir John Franklin)の帆船の捜索に巨額の予算を計上している。そこには、北極圏におけるカナダの主権を歴史的に裏づける意図があると指摘されてきた。実際、2014年9月、帆船発見のニュースが報じられると、スティーブン・ハーパー(Stephen Harper)首相は、これによって北極圏におけるカナダの主権が強固なものになったと『グローブ・アンド・メール(*Globe and Mail*)』紙に寄稿している。Stephen J. Harper, “Franklin discovery strengthens Canada’s Arctic sovereignty”, *Globe and Mail*, September 12, 2014; <<http://www.theglobeandmail.com/news/politics/>>, accessed on September 26, 2014.

(6) 島嶼部のみならず、西部も疎外されてきた。2006年に誕生したハーパー政権は、西部利害を代弁し、オンタリオ、ケベック両州が牛耳ってきたカナダ中央政界を変革しようとした。

(7) 細川道久『カナダの歴史がわかる 25話』、明石書店、2007年、113-118頁。なお、プリンス・エドワード島は、当初はカナダ自治領に加わらなかった(1873年に7番目の州として連邦加盟)。

(8) 細川道久『カナダの自立と北大西洋世界——英米関係と民族問題』刀水書房、2014年、『「白人」支配のカナダ史——移民・先住民・優生学』彩流社、2012年、『カナダ・ナショナリズムとイギリス帝国』刀水書房、2007年、等。

(9) 細川道久「第1章 ヨーロッパの拡大とカナダ」木村和男編『カナダ史(新版世界各国史23)』山川出版社、1999年、31-33, 37-39頁。

(10) 以下の記述で主に参照したのは、次の文献である。Sean T. Cadigan, *Newfoundland*

*and Labrador : A History*, University of Toronto Press, Toronto, 2009; James K. Hiller, *Confederation: Deciding Newfoundland’s Future 1934 to 1949*, Newfoundland Historical Society, St. John’s, 1998; do., “Status without Stature: Newfoundland, 1869-1949”, in Philip Buckner (ed.), *Canada and the British Empire*, Oxford University Press, Oxford, 2008; Peter Neary, *Newfoundland in the North Atlantic World 1929-1949*, McGill-Queen’s University Press, Montreal & Kingston, 1988; Newfoundland and Labrador Heritage Website Project (Memorial University of Newfoundland et. al.): <<http://www.heritage.nf.ca>>; R. O. Rothney, *Newfoundland: A History*, Ottawa, 1953, 3rd ed., 1973;

(11) Harold Innis, *The Fur Trade in Canada: An Introduction to Canadian Economic History*, Yale University Press, New Haven, 1930; do., *The Cod Fisheries: The History of an International Economy*, Yale University Press, New Haven, 1940. 後にコミュニケーション史研究も手がけ(*Empire and Communications*, Clarendon Press, Oxford, 1950; *The Bias of Communication*, University of Toronto Press, Toronto, 1951) 『メディアの文明史——コミュニケーションの傾向性とその循環』(久保秀幹訳)新曜社、1987年)など、マーシャル・マクルーハン(Marshall McLuhan)らに影響を与えた。なお、「ステープル理論」が第三世界の経済発展を論ずるのにどこまで有効なのかという問題がある。

(12) 細川道久「第3章 英仏両帝国の抗争とカナダ」『カナダ史』、96-98頁。

(13) 同上、96-97頁。

(14) 1914年春、「ニューファンドランド号(SS Newfoundland)」のアザラシ(seal)猟師78名が死亡するという「アザラシ猟遭難事件(Sealing disaster)」が起きた。氷原でのアザラシ猟(seal hunt)は危険が伴うが、ニューファンドランド島経済を支えており、同事件は社会を動揺させた。その後勃発した第1次世界大戦は、ナショナリズムの高揚に向かわせ、一

時的ながらも社会不安を緩和させた。Sean T. Cadigan, *Death on Two Fronts: National Tragedies and the Fate of Democracy in Newfoundland, 1914-34*, Allen Lane, Toronto, 2013.

(15) ウェストミンスター憲章第10条において、第2条から第6条までの規定は、オーストラリア、ニュージーランド、ニューファンドランドで採択されないとされた。3者の思惑(帝国・コモンウェルス関係)に違いがあるかどうかは検討に値する。*Statute of Westminster, 1931* [22 Geo.5. Ch. 4], Section 10.

(16) 細川『カナダの自立と北大西洋世界』、第4・5章。

(17) 前掲書、201-204頁。

(18) 前掲書、終章。

(19) 邦語文献も豊富である。B・ベイリン『アトランティック・ヒストリー』和田光弘他訳、名古屋大学出版会、2007年、金澤周作編『海のイギリス史——闘争と共生の世界史』昭和堂、2013年、『東アジア海域に漕ぎだす』(全6巻)東京大学出版会、2013-14年。など。

(20) ニューファンドランド島(の人々)の俗称で大陸本土側のカナダ人が使うことがある。同島の文化的「特異性」は、独特な表現の多い英語によく表われている。G. M. Story, W. J. Kirwin & J. D. A. Widdowson (ed.), *Dictionary of Newfoundland English*, 2nd ed. 1990, rep. University of Toronto Press, 2006. なお、彼らのアイデンティティは複雑である。たとえば、ラブラドル地方との関係は論議的であり、アイデンティティの証しである旗をめぐる論争が繰り広げられている。加えて、ケベック州とラブラドル地方の境界の帰属問題も解消されていない。*The Telegram* (St. John's), August 20 & 24, 2014.

本稿では20世紀中葉までの時期を対象を限定して論じてきたが、今日のニューファンドランド島についても若干付言しておこう。天然資源に大きく依存する同島の経済は、1960年代以降深刻化した。最も早くから同島

を支えてきた鱈は、乱獲によって激減し、1990年代になって鱈漁は禁止されると、3万人以上が失業した。現在も漁業、パルプ・製紙工業、鉄鉱業は主要産業だが、いぜんとして失業率は高い。現在のカナダの国土で最も古くからヨーロッパと接触があり、北米植民地の初期経済を牽引してきた同島だったが、大陸本土側や隣国アメリカ合衆国の発展に伴い、斜陽していったのである。この点においても、同島の歴史は、北大西洋経済の構造変化を長期的に展望する素材を提供するのではなからうか。

【付記】本稿は、2014年度日本学術振興会科学研究費補助金による研究成果の一部である。調査に際して、メモリアル大学(Memorial University of Newfoundland)のショーン・カディガン教授(Professor Sean T. Cadigan)の助言を得た。同教授に謝意を表したい。



セントジョーンズ市街